

「Laparoscopy for Surgeons」

By Barry A. Salky

帝京大学溝口病院外科
山 川 達 郎

文献的には記録がないが、1987年フランスの開業医 Mouret により初めてなされたとされる腹腔鏡下胆摘術は、1988年、同様フランスの Perrisat, Dubois らにより、また米国の Schultz や Reddick らによって1989年、臨床成功例が報告されるに及び、Minimum Invasive Surgeryの理念に沿う手術手技として注目を浴び、世界的なブームを巻き起こした。胆摘術以外にも現在、虫垂切除、迷走神経切除、癒着剝離、ヘルニア修復術などが腹腔鏡下に既に行われているが、今後、同様な方法で行う新しい手術手技がどしどし開発される勢いにある。

実際に筆者は、腹腔鏡下胆摘術を手掛け、腹腔鏡が開腹術に勝る明確な視野を与えてくれることに驚嘆した1人であるが、筆者と同様、多くの外科医は腹腔鏡の修練を受けたこ

とはなく、その有用性も、またいかに用いるべきものなのかも知らないのが普通であろう。その意味で本書は、初心者である外科医にとって、実に機を得て到来した良き参考書と言える。

本書では、まず腹腔鏡下に行う各種疾患の診断と治療に必要な器具の紹介に始まり、手技をわかりやすく解説後、外科医が日ごろ、頻繁に遭遇する炎症性疾患、腫瘍あるいは出血など外傷に伴う腹腔内病変を症例報告の様式で記載している。腹腔鏡の教科書は、元来、内科医により書かれたものが多く適切なものがなかったが、その点、本書は腹腔鏡に精通した2人の外科医が外科医の観点から書いているので、掲載されている1例1例は、外科医にとってすぐにでも役立つ興味あるものばかりである。

治療面では、アメーバ性膿瘍、脾嚢腫、腹腔内術後癒着症の腹腔鏡下手術成功例や腹膜透析用のカテーテルの挿入あるいは抜去を必要とした症例を供覧しながら、その手技と合併症予防上の注意すべき事項を詳細に解説している。

本書に記載されている器具には、古く問題のあるものが含まれているが、前述したごとく器具の改良と相まって腹腔鏡下胆摘術を主体とする腹腔鏡を用いて行う less invasive, less postoperative pain, less hospital stay, less scarring など利点の多いこのような手術手技は、今後、ますます普及していくものと思われ、将来は外科医も修練の一環の中で腹腔鏡を学ぶことを義務づけられるに違いない。

そのような場合は無論のことであるが、これから腹腔鏡下手術手技を習得しようとしている外科医にとって、実際に即し簡便に書かれている本書は、日常の臨床になくはならない道しるべとなりうる外科医必読の書であると言ってよい。

157 pp. with figs. 1990 B5判
¥16,600 (税抜き)

Igaku-Shoin Medical Publishers, Inc., New York

——日本総代理店 医学書院洋書部